

②国際協力・交流等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
文化財の保存修復に関する国際共同研究 〔第1期〕東南アジア諸国の屋外文化財の現地環境と劣化状況調査ならびに保存対策に関する調査研究（セ03）	国際文化財保存修復協力センター	55
敦煌莫高窟壁画の保存修復研究―日中共同研究―（修02）	修復技術部	56
中国文化財保存修復に関する調査・研究 （龍門石窟の保存修復に関する調査研究）（セ04）	国際文化財保存修復協力センター	57
中国陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する研究（セ30）	国際文化財保存修復協力センター	58
中南米諸国文化財保存修復協力事業 ―第1期 パナマの歴史地区の保存修復協力事業―（セ01）	国際文化財保存修復協力センター	59
在外日本古美術品保存修復協力事業（修05）	修復技術部	60
文化財保護に関する日独学術交流（保04）	保存科学部	61
北米の文化財保存研究機関との国際研究交流（保05）	保存科学部	62
アジア文化財保存セミナーの実施（セ06）	国際文化財保存修復協力センター	63
西アジア諸国文化遺産保存修復協力事業（セ33）	国際文化財保存修復協力センター	64

文化財の保存修復に関する国際共同研究

〔第1期〕東南アジア諸国の屋外文化財の現地環境と劣化状況調査ならびに保存対策に関する調査研究

(②セ03-05-5/5)

目 的

タイ、カンボジア、ベトナム等東南アジア諸国の遺跡の保存技術向上をめざし、もって世界の文化遺産の保存に貢献することを目的とするもので、タイ国スコータイ遺跡を中心的な研究サイトとするタイ国政府芸術総局との共同研究、およびカンボジア国アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡を研究サイトとするカンボジア政府アンコール・シムリアップ地域保護管理機構（APSARA）との共同研究を行っている。また、ベトナムの遺跡の調査を開始した。

成 果

カンボジアのアンコール遺跡群の保存修復プロジェクトについては、石材表面に繁茂している生物について調査を行った。その結果、これまで漠然と「生物繁茂」とされてきたものの中には、地衣類、緑藻、苔類など、多種多様な生物種が存在することが判明し、そのそれぞれについて種の同定を進めた。これらの生物は、それぞれの種で繁殖条件が異なるため、こうした種の同定により保存対策の策定に寄与することができると期待される。

日・タイ共同研究として、スコータイ遺跡のスリチュム寺院における研究を継続して行った。同寺院では、1998（平成10）年に大仏表面のクリーニングと表面強化撥水処理を行ったが、2001（平成13）年ごろから大仏の表面に藻類などが繁殖し始めた。この状況に対して、コストやメンテナンスを考慮した今後の保存対策として、草葺きの簡易屋根をかけることが提案されている。その効果を検討するために、大仏と同様にレンガで形を作り漆喰で仕上げたモデル柱を用いて、覆屋と樹脂処理に関するモデル実験を2001（平成13）年より行っている（図1）。実験開始から5年目の今年度には、覆屋を設置したものと設置していないもので藻類などの繁殖状態に差異が見られた。覆屋を設置したものでは、表面での藻類などの繁殖はほとんど見られない（図2）が、設置していないものでは、上面や側面に藻類が認められた（図3）。含水率を比較すると、覆屋を設置したモデル柱では年間を通して10%を下回る低い含水率が保たれており、覆屋を設置していないものでは、雨季には20%を上回った。覆屋の存在によって、モデル柱に供給される雨水が軽減されて含水率上昇が防がれ、藻類などの繁殖が抑制されたと考えられる。こうしたデータの蓄積が、実際の大仏の保存を検討する際に貢献することが期待される。

研究組織

○朽津 信明、青木 繁夫、二神 葉子、宇野 朋子、関 博充（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）



図1 スコータイ遺跡におけるモデル柱



図2 覆屋あり



図3 覆屋なし

覆屋がない方（図3）では表面に藻類と見られる汚れが認められるが、ある方（図2）ではそれが少ない。

敦煌莫高窟壁画の保存修復研究—日中共同研究— (②修 02-05-5/5)

目 的

敦煌莫高窟壁画の保存修復技術の開発を目的として共同研究を行っている。第53窟をフィールドとして修復履歴管理システムの開発、壁画剥落止め材料の開発、壁画彩色技法の光学的調査方法の開発、修復用語集の編集などの調査研究を進めている。

概 要

第4期共同研究における実施項目は、①壁画修復履歴管理システムの運用、②壁画修復材料の試験施工と改良、③光学的的方法による壁画彩色技法の調査方法に関する研究、④第53窟壁画修復の実施などである。

本年度は、2005（平成17）年8月に行った第53窟壁画の修復共同作業で、事前の打ち合わせを行い、アルカリ処理したゼラチンのほかに中国側で未体験のメチルセルロースを使用した修復技術の移転も行うこととした。平成16年度に壁画強化に使用した、水で溶いたアルカリ処理ゼラチンおよびメチルセルロースを使用して壁画の貼り戻しを行った。壁画は30年前に行った修復で使用された酢酸ビニル樹脂が劣化し、壁画面を持ち上げて剥離状態にあった。その下にゼラチンもしくはメチルセルロースを入れて軽く圧力をかけて接着した。今後は、修復作業の進展に伴う塩類析出が問題となっており、壁面内塩分に関する測定、脱塩処理手法の開発が求められる。

敦煌側研究者の受け入れについては、2006（平成18）年1月9日～1月28日まで、敦煌研究院保護研究所文博館員の王小偉氏を招へいし、第53窟壁画の顔料分析と日本における文化財修復の実際を見学するなど研修を行った。王氏の専門分野は応用化学であり、壁画土壌及び顔料分析では分析手法の相互理解が進み、日中双方にとって将来的に有効な成果を上げることができた。また、日本における文化財修復の研修では、日中両国の修復に関する考え方について、修復現場見学时に質疑応答や意見交換を行い、第4期共同研究にとって有効な成果となった。平成17年度、過去20年間の日中共同研究の年表を付録にした第4期最終報告書を刊行した。

<報告書> 1件

『敦煌莫高窟壁画保存修復に関する日中共同研究2005』 東京文化財研究所 74p 06.3

研究組織

○加藤 寛、加藤 雅人、早川 典子、森井 順之（以上、修復技術部）、中野 照男、勝木言一郎（以上、美術部）、城野 誠治、皿井 舞（以上、協力調整官-情報調整室）、青木 繁夫、岡田 健、谷口 陽子（以上、国際文化財保存修復協力センター）



第53窟壁画西壁の修復作業



熊本県立装飾古墳館における王研究員の研修

中国文化財保存修復に関する調査・研究 (龍門石窟の保存修復に関する調査研究) (②セ 04-05-5/5)

目 的

中国龍門石窟の保存に協力するため、龍門石窟研究院との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の現状を詳細に調査し、保存修復の方法についての研究と具体的な処置、人材の養成など、多角的で実効的な成果をあげようとするのが、本研究の目的である。

成 果

1) 人材養成

長期研修：龍門石窟研究院から毎年1名、保護研究室の研究員を受け入れ、長期研修を実施している。5人目の人材として2005（平成17）年6月から国際協力機構（JICA）の資金援助を受けて研修を開始した陳建平氏が、8カ月間の日程を終了し2006（平成18）年2月中旬に無事帰国した。研修では、鎌倉市の丘陵部に現存する鎌倉時代から南北朝時代の石窟墳墓、通称"やぐら群"を対象に、石窟内部の壁面に存在する「濡れ」の状態を観察し、その変動を把握し、さらに石窟の劣化との関係について考察して有効な成果をあげた。その成果は日本応用地質学会平成17年度研究発表会講演論文集および『保存科学』45号で発表された。

短期研修：毎年の個別のテーマによって、短期研修も実施している。今年度は2005（平成17）年12月4日から12月17日までの2週間、龍門石窟研究院保護センター李心堅研究員と楊剛亮研究員を招へいし、石造物の保存修復作業において塗布した材料の効果に関する評価方法、および地理情報システム（GIS）を活用した文化財保護データの管理方法に関する研修を行った。研修期間中は、「陝西唐代陵墓石彫像保護修理事業」に関連して招へいした西安文物保護修復センターの馬紅琳研究員、周偉強研究員と研究交流をはかった。

2) 報告書作成

本研究が5年間の期間を終了するにあたり、報告書『龍門石窟の保存修復に関する調査研究』を作成した。内容は以下の通り。

1. 序 岡田健
2. 研究の総括 岡田健 「龍門石窟の保存修復に関する調査研究」と龍門石窟研究院人材育成事業
3. 長期研修生5名の記録
4. 研究論文（2001〔平成13〕年～2005〔平成17〕年）
 - I. 秋山純子、馬朝龍、早川泰弘 龍門石窟の彩色および風化生成物に関する研究
 - II. 朽津信明、高東亮、秋山純子、森井順之 鎌倉のやぐらに見える凝灰質砂岩の風化とそれに与える湿度・温度の影響
 - III. 朽津信明、森井順之、范子龍、秋山純子 鎌倉市・百八やぐらの劣化と水環境
 - IV. 朽津信明、李心堅、関博充、森井順之、遠藤努 鎌倉市百八やぐらの保存を目的とした亀裂計測
 - V. 朽津信明、李心堅、関博充、森井順之、遠藤努 文化財の強度測定法と風化度合いの定量化について
 - VI. 朽津信明、関博充、陳建平 鎌倉市百八やぐらにおける乾湿繰り返しと岩石風化について

研究組織

○岡田 健、青木 繁夫、朽津 信明、関 博充、谷口 陽子（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）、中野 照男（美術部）、城野 誠治（協力調整官—情報調整室）

中国陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する研究 (②セ 30-05-2/4)

目 的

財団法人文化財保護・芸術研究助成財団と陝西省文物局の合意により平成16年度から4年計画で実施される陝西唐代陵墓石彫像保護修理事業に日本側専門機関として参加し、西安文物保護修復センターとの共同により、唐時代の乾陵、橋陵、順陵に附属する石彫像の保存修理に関して、科学的研究と保存修理作業を行うと共に、石彫像保存地区の保存計画策定の研究を行う。

成 果

唐代陵墓に附属する石彫像は、陵墓を守護するという意味からも、またその大きさ、数の多さからも、現地において保存管理するしかないという文化財である。しかも当初から露天にあったため、これから覆屋を設置することにも異論がある。このため、造営以来1,300年の歳月を露天で過ごしたこれらの石彫像については、これからもこの環境のもとに置かれることを前提として保護の対策を講じなければならない。現在までの劣化発生・発育と環境との関係、現在置かれている環境が石彫像に及ぼしている諸問題、今後保護対策を講じる際に検討すべき事、石彫像の保護はどのように環境についての考察が不可欠である。このような認識から、石彫像の劣化・風化についての技術的問題の検討に入る前段階として、環境の問題について研究を行うことを目的として、「屋外で保存される石造文化財と環境に関する研究」をテーマとし、日中専門家による研究会を開催した。

保存修復、地質、考古学などの分野の専門家20人以上が参加し、唐代陵墓石彫像の劣化の発生、発育と環境との関係、具体的な環境の観測、劣化と環境の関係、及び劣化に対する有効な処理技術、保護材料などの問題について、掘り下げた討論と意見交換を行うことができた。

【主催】 東京文化財研究所・西安文物保護修復センター 【場所】 西安文物保護修復センター

【日程】 2005（平成17）年11月21日～23日（3日間）

第1日（21日）：乾陵・順陵視察 第2日（22日）：研究会 第3日（23日）：兵馬俑坑視察

【内容】

- 「大分県内所在の石造文化財の保護」（大分県立歴史博物館・山田拓伸）
- 「大気汚染と石造文化財の風化の関係の研究」（東京学芸大学・二宮修治）
- 「露天石灰質石刻的保護研究」（浙江大学・張秉堅）
- 「盱眙露天石灰質石刻的保護修復」（南京博物院・陶保成）
- 「唐陵石刻病害保存環境及病害研究」（西安文物保護修復センター・馬濤）
- 「乾陵石刻裂隙超声探測研究」（西安文物保護修復センター・馬紅琳）

研究組織

○岡田 健、青木 繁夫、朽津 信明、関 博充、谷口 陽子（以上、国際文化財保存修復協力センター）



乾陵に設置した気象観測装置

中南米諸国文化財保存協力事業 —第1期 パナマの歴史地区の保存修復協力事業— (②セ 01-05-5/5)

目 的

中南米諸国には、マヤ文明やアステカ文明の遺跡やスペイン植民地時代の中世都市など、世界的にみて価値の高い文化財が多く残されている。一方、これらの国々の遺跡や歴史的建造物は、木造・石造・レンガ造などであり、その多くは虫害、風化、劣化などによって文化財の価値が失われる危機に瀕している。東京文化財研究所は、これまでは主にアジアの文化遺産を中心に国際協力を実施し成果をあげているが、本事業においては、パナマ政府からの協力依頼を契機に、中南米諸国との研究協力を推進しようとするものである。

中南米諸国の専門家と協力して文化財保存修復に関して研究を行うことは、これまでとは異なった地域における経験を積む機会であり、研究の進展と普遍化に役立つとともに、相手国の専門家養成と専門知識及び技術の移転に関して効果的な国際貢献ができると期待される。

両国の協力事業をより円滑かつ広汎なものとするために、2002（平成14）年2月、東京文化財研究所とパナマ文化庁は研究及び交流の合意書を取り交わしている。

成 果

1) 研究成果報告書作成のための打合せとパナマの歴史遺産の視察

2005（平成17）年7月8日から10日までの日程で、野口英雄と岡田健がパナマへ出張し、パナマ側研究協力者と報告書作成のための打合せを行うとともに、パナマの歴史遺産「プレ・コロンビア時代の道」および「サン・ロレンツォ砦」を視察した。また、カスコ・アンティグオ保存事務所を訪れ、現状と保存の今後について意見の交換を行った。併せて日本国大使館を訪れ、保存事務所の意向とカスコ・アンティグオの現状について報告した。

2) メキシコの歴史遺産の視察

2005（平成17）年7月10日から13日までの日程で、引き続きメキシコを訪問し、歴史遺産局を訪問して専門家と意見交換をするとともに、メキシコシティ中心の歴史地区および古代遺跡ティオティワカン、国立博物館を視察した。

3) 報告書の刊行

5年間の成果として、スペイン語・英語による報告書 *The Japan-Panama Asia-Latin America Trans-Regional Project Conservation of World Heritage Cities* を作成し、この間3度にわたるシンポジウムに参加したパナマ、メキシコ、コロンビア、フィリピン、シンガポールに送付して各国の専門家への配布を依頼するとともに、日本国内の専門家にも配布した。

研究組織

○岡田 健、稲葉 信子、野口 英雄、宗田 好史（以上、国際文化財保存修復協力センター）



サン・ロレンツォ砦



報告書

在外日本古美術品保存修復協力事業 (②修 05-05-5/5)

目 的

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関連する研究を行う事業である。平成3年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、平成9年度から工芸品など欧米の修復技術で修復の困難な分野にも協力対象を拡げた。

この事業で修復した作品の公開によって、わが国の修復技術に対する理解が深まり交流が促進されている。本事業の立案のために、欧米の美術館、博物館にて作品調査のほかに修復技術に関する討議を行い、併せて輸送手続きに関する協議を行っている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。

この修復協力事業によって修理された作品の公開展示回数が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって所蔵の日本古美術品に対する関心が新たに高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間でネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し効果をあげている。

概 要

平成17年度は、継続修理を含む絵画7件、工芸品3件の作品を修復した。

<絵画>

- 1) 「大政威徳天縁起絵巻」 6巻 ギメ東洋美術館 (2年計画の2年目)
- 2) 「京洛凶屏風」 6曲1双 ベルギー王立美術歴史博物館
- 3) 「涅槃図」 1幅 ベルギー王立美術歴史博物館
- 4) 「平家物語凶屏風」 6曲1双 オーストリア応用美術館
- 5) 「天河弁財天曼荼羅図」 1幅 ワルシャワ国立博物館
- 6) 「鳥図屏風」 6曲1双 シアトル美術館
- 7) 「二河白道図」 1面 シアトル美術館

<工芸品>

- 1) 「黒韋腰取威筋兜」 1頭 メトロポリタン美術館 (2年計画の2年目)
- 2) 「耕作図蒔絵料紙箱」 1合 ロサンゼルス・カウンティ美術館 (2年計画の2年目)
- 3) 「山水人物蒔絵筆筒」 1基 スペイン国立装飾美術館 (2年計画の1年目)

平成17年度、絵画の事前調査ではヒューストン美術館9点、キンベル美術館18点、ニューサウスウェールズ美術館8点、オーストラリア国立美術館4点、ビクトリア国立美術館4点の調査を行った。また、工芸品の事前調査ではケルン東洋美術館28点、キオッソーネ東洋美術館7点、アラゴン州立サラゴサ美術館8点の調査を行った。

平成16年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて『在外日本古美術品保存修復協力事業』の報告書を刊行した。また、この事業の庶務を管理部、修復に関する調査・修復業務・報告書作成を修復技術部と美術部、写真記録の作成および整理業務を協力調整官一情報調整室がそれぞれ担当した。

<調査・研究報告書等刊行数> 1件

『在外日本古美術品保存修復協力事業修理報告書 平成17年度(絵画/工芸品)』 212p 東京文化財研究所 06.3

研究組織

○加藤 寛、加藤 雅人(以上、修復技術部)、佐野 智典(管理部)、城野 誠治(協力調整官一情報調整室)、中野 照男、鈴木 廣之、勝木言一郎、津田 徹英、塩谷 純、*綿田 稔(以上、美術部)、青木 繁夫、稲葉 信子(以上、国際文化財保存修復協力センター)

*平成17(2005)年4月1日～12月31日まで協力調整官一情報調整室、平成18(2006)年1月1日より美術部

文化財保護に関する日独学術交流 (②保 04-05-5/5)

目 的

日本とドイツとの間では、1974（昭和49）年に科学技術に関する学術交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学術交流が行われてきたが、1990（平成2）年の第13回日独科学技術合同交流委員会においてドイツ側から「文化財保護に関する日独学術交流」の提案があり、1992（平成4）年から交流が開始された。本研究は日本とドイツ両国の文化財保護に関する知識や経験を交換し、それぞれの国の文化財保護に資することを目的としている。

概 要

平成15年度よりドレスデン工科大学との間で「石造文化財、石造建造物の保存」に関する共同研究を行っている。2005（平成17）年には、7月に保存科学部の犬塚が米国シラキウス大学でドレスデン工科大学の協力のもと開催された建築環境の解析に関するフォーラムに参加した。また、9月に石崎がドレスデン工科大学を訪問し、研究員のグルネワルド氏、プラーゲ氏と建築材料中の水分特性の測定に関する共同研究を行った。11月には、ドレスデン工科大学の研究員のグルネワルド氏、プラーゲ氏、フェヒナー氏を招へいして、共同実験を行うと共に、京都大学で「建築材料中の水分移動とその解析に関する研究」というテーマで研究会を開催した。本研究会では、京都大学の小椋大輔氏の「コンクリートの熱水分特性—液相、気相の水分拡散係数の分離」などの建築材料の水分特性に関する基礎的な研究や、ドレスデン工科大学のジョン・グルネワルド氏の「アムステルダム国立博物館の改修—毛管作用のある断熱材を用いた壁面の熱水分特性の改善—」など現場への適用事例など多岐にわたる発表があり、活発な意見交換がなされた。建築材料の水分特性測定に関しては、ドレスデン工科大学のルディー・プラーゲ氏とカ ril・マグディ氏（学術振興会外国人特別研究員）とで、X線を用いた共同実験を行った。2006（平成18）年2月には、カ ril・マグディ氏がドレスデン工科大学を訪問し、ルディー・プラーゲ氏らと共に実験結果のまとめを行った。また、本年度は、本プロジェクトの最終年度であるので、報告書を作成した。

研究組織

○石崎 武志、犬塚 将英、佐野 千絵、早川 泰弘、（以上、保存科学部）、三浦 定俊（協力調整官）、カ ril・マグディ（学術振興会外国人特別研究員）、高見 雅三（北海道立地質研究所）



京都大学、銚井研究室の実験室での討論の様子

北米の文化財保存研究機関との国際研究交流 (②保 05-05-5/5)

目 的

北米には、世界を代表する文化財の研究機関が所在する。その例として、アメリカにはフリア・サックラー美術館が所属するスミソニアン研究機構やゲティ保存研究所があり、カナダにはカナダ保存研究所 (CCI) などがある。それらの研究者と、文化財保存に関する実りある国際研究交流を行うことを目的とする。

概 要

平成 17 年度も継続してカナダ保存研究所 (CCI) との国際研究交流を行った。CCI (1972 年設立、カナダ文化財局) はカナダ国内の文化財保存のために設立された研究所であるが、保存環境に関する研究を進めるだけでなく、北米を中心に世界中の博物館、美術館等に対して保存のための助言や指導を行っている。

近年、世界の博物館、美術館等で、地球環境や人の健康を守るため大規模燻蒸を避けようとする気運が高まり、害虫の被害を未然に防ぐ予防対策や、大規模燻蒸以外の代替殺虫法の普及が進められている。わが国も 2004 (平成 16) 年末に臭化メチル生産停止となり、代替システムへの移行に積極的に取り組んでいる。平成 16 年度 CCI よりトム・ストラング氏を招へいし、共同で IPM ワークショップを行ったが、平成 17 年度はさらにその経験を生かし、ストラング氏とともに昨年のワークショップ参加館などにより博物館等の現場からの IPM の事例報告を行う「IPM コロキウム」を企画・開催した。また、ストラング氏と国内のいくつかの博物館等を回り、IPM に関しての現地調査を行った。

IPM コロキウムは、これまで IPM についての研究会や研修を開催するなかで、「他館の実施例を聞き、意見交換する場がほしい」との意見が多かったことから、IPM を使った管理を実践している国内の 5 つの博物館よりその事例を話してもらい、参加者と情報交換を行った。また北米やヨーロッパの博物館での IPM の実施状況について、最新事情をストラング氏よりお話をいただき、理解を深める場となった (参加者 80 名)。

<IPM コロキウムプログラム>

日 時：2005 (平成 17) 年 11 月 17 日 (木)

会 場：東京文化財研究所セミナー室

開会あいさつ

「国立歴史民俗博物館における IPM の活動」

国立歴史民俗博物館・安齋 信人

「国立民族学博物館における IPM と防虫・殺虫処理法の使い分け」

国立民族学博物館・園田 直子/日高 真吾

「建築段階から開館までの IPM の取り組みについて」

九州国立博物館・本田 光子

「安土城考古博物館における IPM とデータの活用法について」

安土城考古博物館・高木 叙子

「土浦市立博物館の現在の取り組み—有害生物調査・除塵防黴・二酸化炭素燻蒸の 3 工法による実践—」

土浦市立博物館・中澤 達也

“Is Integrated Pest Management Difficult?” Canadian Conservation Institute, Tom Strang

(抄訳/解説・木川 りか)

総合討議

研究組織

○木川 りか、佐野 千絵、石崎 武志、犬塚 将英、吉田 直人 (以上、保存科学部)、三浦 定俊 (協力調整官)

アジア文化財保存セミナーの実施 (②セ 06-05-5/5)

目 的

アジア文化財保存セミナーは、アジアの文化財保存に関する種々の問題について報告と協議を行い、日本及びアジア各国間の相互理解を深め、国際協力の推進に貢献することを目的として開催されている会議である。平成13年度からは5か年計画で、日本を含むアジア9カ国から参加国と参加者を固定し、「アジア諸国の文化財保護制度に関する研究—変化し発展する文化遺産の役割」を総合テーマに、各国における文化遺産保護の制度とその運用について様々な角度から共同研究を行ってきた。

文化の多様性への尊重から、今改めて世界の各地域において文化遺産の保存とは何か、そして文化遺産の保存が社会に果たす役割について考え直すことが求められている。平成13年度は、文化財保護に関する法律の内容とその成り立ちについて、平成14年度は、機構・体制とその運用の状況について、平成15年度は信仰、民族、経済の問題について、平成16年度は、文化遺産の将来像と保護制度について各国から報告があった。今回の平成17年度第14回セミナーはその締めくくりの会議となるもので、「文化遺産とともに生きる—アジア 変革期における展望：その理論と概観」をテーマに、これまでの各国レポートの体裁ではなく、アジアの文化遺産の将来像を考える上で重要と考えられるキーワードを参加者の間で分担して論文を用意し、最後の討論を行った。

概 要

日 時：2005（平成17）年10月24日～10月28日

会 場：東京文化財研究所 会議室 出席者数：16名

テーマ：文化遺産とともに生きる—アジア 変革期における展望：その理論と概観

10月24日 セミナー第1日

開会式 挨拶 東京文化財研究所・鈴木規夫 趣旨説明 東京文化財研究所・稲葉信子

「政治あるいは政治的関連性」 東京文化財研究所客員研究員／学習院女子大学・野口英雄

「アジアにおけるアイデンティティ、政治、文化遺産の管理」 韓国啓明大学校・金権九

「伝統文化活性化のための持続的な取り組み」 東京文化財研究所客員研究員／京都府立大学・宗田好史

「フィリピンにおける文化遺産の管理と運営」 フィリピン国立歴史研究所・エメリタ・V. アルモサーラ

「機関相互の協力と開発」 ベトナム文化情報省・グエン・クオック・フン

「文化遺産保存の一貫性と現代社会の要求」 中国清華大学・呂舟

10月25日 セミナー第2日

「文化遺産の側面からみた文化資源管理」 イラン文化財観光機構・アデル・ファルハンギ・シャベスタリ

「コミュニティ考古学」 タイ文科省芸術総局・ピチャヤ・ブーンピノン

「有形から無形へ—文化遺産への総合的アプローチ」 東京文化財研究所・稲葉信子

「人的資源の開発・国際協力」 東京文化財研究所・岡田健

「現代における文化遺産の意味」 東京文化財研究所名誉研究員／筑波大学・斎藤英俊

「集団の記憶」 東京文化財研究所・青木繁夫

「生きている聖なる遺産とオーセンティシティ概念」 スリランカ・ケラニヤ大学・ジャガス・ウィーラシンハ

「きわめて重要な協調関係の構築をめざして：創造者と保護者」 インド世界記念物基金・アマタ・ベイ

10月26日 セミナー第3日 総合討議 閉会式

10月27日～28日 スタディツアー（京都市）

研究組織

○稲葉 信子、青木 繁夫、岡田 健、山内 和也、朽津 信明、二神 葉子、関 博充、大竹 秀実、野口 英雄、宗田 好史（以上、国際文化財保存修復協力センター）

②国際協力・交流等 Area10

西アジア諸国文化遺産保存修復協力事業 (②セ 33-05)

2. イラク

1) イラク文化財専門家研修事業

イラクは、メソポタミア文明発祥の地であり、世界的に重要な考古学遺跡が多く存在するのみならず、バグダードをはじめとする国立博物館には膨大な数の遺跡から発掘された貴重な遺物も大量に保管されている。残念ながら、紛争中及び紛争後の混乱の中で、博物館の収蔵品が破壊され、また、重要な遺跡も盗掘の被害を受けてしまった。しかるに、現時点では、こうした文化財を保護し、調査する専門家のみならず、最新の文化財修復技術に関する知識や経験が不足している。そこで、本事業は、イラク人専門家の人材を育成し、イラク人自身による文化財復興を支援することを目的としている。

ユネスコ日本信託基金による人材育成とタイアップして、バグダード国立博物館の保存・修復専門家 2 名の研修を実施した。詳細については、172 頁を参照のこと。

研究組織

○青木 繁夫、稲葉 信子、山内 和也、朽津 信明、前田 耕作、岩井 俊平、谷口 陽子、西山 伸一、宇野 朋子、岩出 まゆ、関 博充、大竹 秀実（以上、国際文化財保存修復協力センター）、毛利光俊彦、巽 淳一郎、森本 晋、小澤 毅、肥塚 隆保、高妻 洋成、降幡 順子、島田 敏男、渡辺 丈彦、窪寺 茂（以上、奈良文化財研究所）、足立 守、中村 俊夫、宮治 昭（以上、名古屋大学）